「奨学金が与えてくれた、未来への一歩」　大学 保健医療学部　4学年

「サッカー選手の支えになれる理学療法士になりたい」――これは高校時代から変わらない私の目標であり、今も大学で理学療法を学びながら追いかけている夢だ。理学療法士は身体を治すだけでなく、患者さんの人生や夢そのものを支える存在だと私は信じている。

これまでの大学生活では、1週間の評価実習を2回、1ヶ月の臨床実習を1回、そして4年次には1ヶ月半の治療実習を2回経験してきた。急性期や回復期といった異なるステージの現場で、患者さんと一対一で関わりながら、評価や治療、リスク管理までを実践的に学んだ。実習では、教科書通りにいかない場面ばかりで、「人と関わる難しさ」や「その人にとっての最適解を考える視点」の大切さを痛感した。特に、実際に自身のプランが患者さんの動作を改善に導いたときの喜びは、理学療法士という仕事のやりがいを実感する瞬間でもあった。失敗や葛藤も多くあったが、それを乗り越えていく過程で、知識以上に「臨床力」や「人間力」が問われる職業であることを学んだ。

回を重ねるごとに、自分に足りない視点や技術に気づき、それを乗り越える努力を続けてきた。ときに悩みながらも、それでも「もっと良くしたい」「その人にとってベストな支援をしたい」と思い続けられるこの仕事に、私は強く魅力を感じている。

そんな学びの時間を支えてくれたのが、長谷育英奨学会の奨学金である。経済的な支援だけでなく、「学び続ける権利」を得られたことが、私にとって何よりの励みだった。学費の不安を抱えることなく、実習や課題に打ち込める環境があることは、夢を追う上で大きな土台となった。

これから私は、スポーツの現場で選手のパフォーマンスを最大限に引き出せる理学療法士を目指し、さらに技術と経験を積み重ねていきたい。そして、支援を受けた者として、いずれは誰かの夢を支える側に立ちたいと思っている。